



美術情報センター（2016年撮影）

撮影：加藤 健



美術図書室（2024年撮影）

撮影：新津保建秀

横浜美術館美術図書室（旧・美術情報センター）の リニューアルについて

長谷川菜穂・石川明子

1 はじめに

これまで美術情報センター（現・美術図書室）は、横浜美術館の3つの理念である「みる」「つくる」「まなぶ」の「まなぶ」を司り、美術に関する幅広い情報を提供する事業を行ってきた¹。2021年3月からの横浜美術館大規模改修工事に伴い、美術情報センターは3階から2階へ移設され、閲覧室などを全面的にリニューアルすることとなった。

リニューアルに関連する作業は、2019年度から本格的に始まり、約4年にわたる一大プロジェクトとなった²。本プロジェクトでは、横浜美術館のなかでの図書室機能のあり方や、今後の活動方針について改めて検討がなされた。時代の変化に即したサービス内容、運営体制、そして閲覧室の空間や設備など、これまでに抱えていたハードからソフトにかかわる様々な課題を含めて司書を中心に議論を重ね、その結果を改修作業に反映させていった。

本稿では、2024年11月1日にリニューアルオープンした横浜美術館の美術図書室（旧・美術情報センター）について、その改修内容や更新作業を報告する。美術図書室のリニューアル整備に携わった司書の立場から、その整備内容について、過程も交えながらまとめる。

2 リニューアルの内容

2.1 活動方針の策定

閲覧室の移設にかかわるハード面から、新たな活動方針の策定や蔵書の更新、運営体制の見直しといったソフト面まで、さまざまな再整備を行った。

最初に取り組んだのは、再開館後の指針となる活動方針を新たに策定することだった。新しい活動方針は2021年度に策定された横浜美術館の第3期指定管理提案書³にまとめられている。本提案書のなかで、美術図書室は「じゅうエリア」の中核的な機能のひとつとして位置づけられ、大きく次の3つの方針が掲げられた。

- ①多様な層への訴求
 - ②専門性の維持
 - ③持続可能な運営体制の整備
- ①美術に関心のある従来の利用者だけではなく、アトリエ棟を利用する家族連れや、美術館の周辺を訪れる

1 横浜美術館に「美術情報センター」が設置された経緯およびその活動内容、名称や組織の変遷については、次に詳しい。柏木智雄「横浜美術館のはじまり」『横浜美術館 全記録 1960-2021—構想、建設、開館、運営、活動』横浜美術館、2023年、4-27頁。
松永真太郎「横浜美術館の美術情報センターについて」『横浜美術館 全記録 1960-2021—構想、建設、開館、運営、活動』横浜美術館、2023年、55-61頁。

2 2021年3月から2024年10月は館外への閲覧サービスを停止、休室。

3（公財）横浜市芸術文化振興財団が横浜市に提出した提案書は、横浜市のウェブサイトで確認可能。

「横浜美術館の指定管理者の選定について」

<https://www.city.yokohama.lg.jp/business/kyoso/public-facility/kaku-katsuyou/bunka/senteihyoka/bijyutukansenitei/yma-sitekanrisentei.html>

（参照 2025-11-15）

幅広い利用者層に訴求する活動を行うこと、②美術館に併設されている図書室として、研究者や美術を学ぶ人が必要とする資料や情報を的確に提供すること、③これらを実現するために必要となる持続可能な組織体制を構築し、利用者のニーズにあわせた蔵書の整備を行うことである。

活動方針の策定にあたっては、開館から30年以上が経過し、美術館を取り巻く状況が大きく変化しているなかで、美術情報センターが横浜美術館のなかで果たしてきた役割について振り返り、当初に想定されていた活動内容・サービス・収集方針（資料1参照）などが現在の利用者のニーズを反映したものになっているのかなどについて、司書を中心に検証が重ねられた。検証を進めるなかで、持続可能な運営体制の構築が、美術館のリニューアル後の方針のひとつになっていたこともあり、活動内容を広げるのではなく、図書資料の収集と提供を主な機能に据えることが決まった。資料の収集範囲は、横浜美術館と関係の深い作家や作品に関する資料や、横浜という地域の美術に関する資料に重きを置くことにし、横浜美術館に併設する図書室としての蔵書の特色を打ち出していくこととなった。

主な活動の方向性を図書資料の提供に定めたことにより、施設名称をこれまでの「美術情報センター」から、より事業内容が分かりやすい「美術図書室」という名称へと変更した。

もうひとつ、誰もが気軽に立ち寄ることができる美術館になることがリニューアル後の重要なミッションとして掲げられ、美術館内に「じゅうエリア」と名付けられた無料で利用できる空間が拡充されることになった。美術図書室も「じゅうエリア」を構成する一つのエリアとして位置づけられていたため、再整備では、利用しやすく心地のよい空間を創り出すことが重視された。

4

美術情報センター

横浜美術館は、特色ある美術館をめざす試みの一つとして、美術に関連したさまざまな情報を収集・蓄積し、市民に提供することを目的とする「美術情報センター」としての機能をもっている。

美術情報センターの機能としては、次のものがあげられる。

- (1) 市民の自主的・創造的活動を支援するため、横浜美術館の収蔵する美術作品・図書資料・その他関連資料並びに全国の主要な美術館・博物館・画廊などの情報を、広く市民に提供する。
- (2) 横浜美術館が展覧会活動、創作活動、教育普及活動を推進する中で、情報面から美術館業務を支援する。

具体的には、美術の情報を次の方法により市民・研究者に提供している。

- ・図書資料（美術図書室）

国内・外の美術図書、雑誌、展覧会カタログ・紀要などを体系的に収集し、美術図書室において閲覧利用できる。

- ・コンピュータ（美術情報システム）

館内（美術図書室・美術情報ギャラリー）に設置された検索用端末機により、美術情報を検索することおよびこれをプリントアウトすることができる。

- ・映像メディア（美術情報ギャラリー）

名画映像レファレンス・ビデオライブラリーの二つのシステムにより、映像による美術情報提供を行っている。

- ・フィルム&ビデオ・アーカイヴ

実験映画作品、ビデオ・アート作品などを収集し、映画会などで公開する。

2.2 ハード面のリニューアル

2.2.1 閲覧室の移設

改修前の美術情報センターは美術館の南側3階にあった。閲覧室の面積が約640㎡で、47席の閲覧席を有する、高い天井と広い空間が特徴的な閲覧室であった。しかし、館内での場所が分かりづらく、美術館を訪れた人の利用につながりにくいという課題があった。利用者動線を改善するため、同じ南側の2階に移設されることが決まった。

2階への移設により、閲覧室の面積は234.4㎡に縮小したが、ガラス張りです外光が差し込む、明るい空間となった。改修前は3階に位置していたため、閲覧室へアクセスするには階段やエレベーターを使う必要があった。2階への移設により、階段を使わずに閲覧室へアクセスできるようになったため、利用者動線は格段に向上した。美術館の正面出入口やショップ・カフェと同じ階層に位置し、向かいにギャラリー9と呼ばれる展示室ができたことにより、美術図書室の場所が美術館を訪れる人たちから認識されやすくなった。実際に2024年11月のリニューアルオープン後から、ギャラリー9の鑑賞後に立ち寄る来館者を図書室で見かけるようになった。

また、美術館の屋外に、美術図書室への誘導を促す立看板が新設されたことにより、図書室事業の視認性も

4 『横浜美術館年報』1号、1993年、131頁。

向上した。これまで美術館建物の外観からは、館の中で行われている活動が見えづらいという課題があった。新設の立看板は大きな本のかたちをしており（写真1）、横浜美術館の図書室の活動が可視化されている。

横浜美術館の前には「美術の広場」と呼ばれる広場があり、その広場を挟んで商業施設が立地している。平日でも常に人の往来があり、週末ともなると様々なイベントが行われる場所になっている。移設や立看板の新設により、美術図書室がより認知され、利用者層が一層拡大することを期待している。



写真1
新設の立看板

2.2.2 閲覧室のリニューアル

閲覧室のリニューアルにあたっては、利用しやすく、開かれた空間になることを目指した。また、専門家（美術館の専門職員や外部の研究者、美術を学ぶ人）に向けたサービスと一般の利用者へのサービスを両立させることにも留意した。

2.2.2.1 ゾーニング

幅広い利用者層が共存できる環境にするため、閲覧室はエリアをゆるやかに区分けした。明確な目的を持たずに立ち寄る利用者は、北側の入口から近い場所（図1中の番号11, 13, 14, 15）を主な利用ゾーンとした。このゾーンには大型の閲覧機とソファが設置され、広々とした空間で読書ができる。窓からは、屋外に設置された当館の収蔵作品、新宮晋の《風の音符》を眺めることもできる。入口付近には、「こどもの本」コーナーを設置し（図1中の番号13付近）、親子連れでも気軽に入室ができるよう工夫を施した。

一方、調査研究を目的に来館する利用者には、南側の、入口から奥まった場所（図1中の番号4, 7, 8, 9付近）に個別に仕切られている席を設け、集中して作業が行える環境を用意した。

ユーザーごとに空間をゾーニングすることで、幅広い利用者層を取り込みつつ、各々が過ごしやすい閲覧環境を作り出している。

2.2.2.2 排架内容

閲覧室の書架に並べる本や排架内容については、床面積の縮小により書架の収容能力が減少したため、表1の通りに方針を見直した。なお、初心者から専門家まで訴求できる幅広い内容の資料を排架する方針は、改修前と変わらない。

図1

美術図書室閲覧室図 (2025年1月時点)

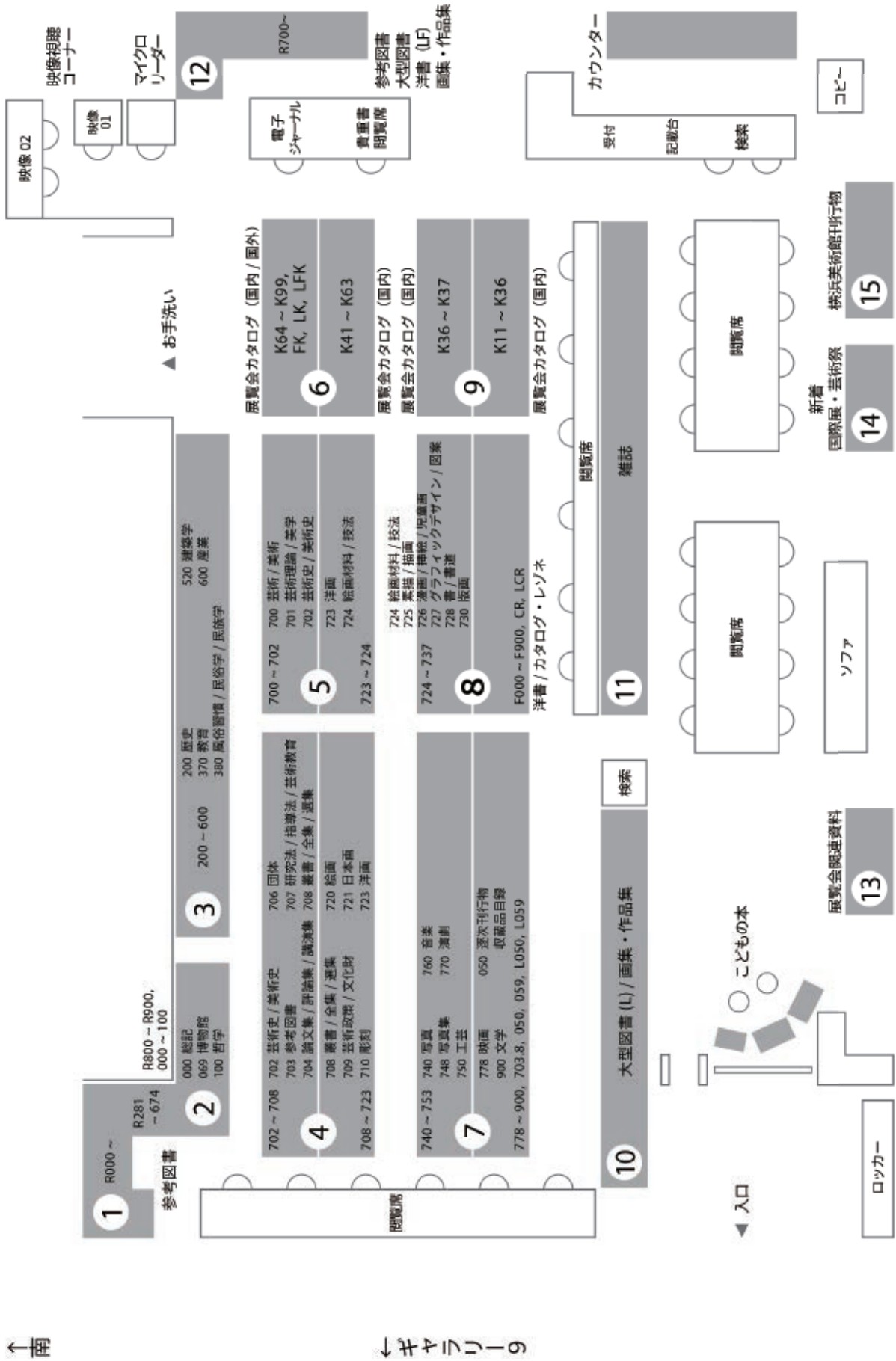


表1

リニューアル後の閲覧室書架排架方針

資料種別	排架方針	排架場所 (数字は、図1の番号に相当)
美術関連の図書	原則、出版年が2000年代以降の図書。横浜美術館の収蔵作家に関する資料。	2, 3, 4, 5, 7, 8, 10, 12
展覧会カタログ	開催時期が過去5年間分の、国内外で開催された展覧会の図録。	6, 9
参考図書	美術のレファレンスで頻繁に参照する資料。	12
雑誌	定期購読雑誌（和・洋）。	11
	おもに『美術関係雑誌目次総覧』（国書刊行会,2000年）に収録されている雑誌の復刻版。『日本美術年鑑』（東京文化財研究所）などの年鑑。	7
横浜美術館の活動に関するテーマの資料	国内外の国際展・芸術祭に関連する資料。	14
	横浜美術館の活動にかかわる図書や資料（目録、年報、紀要、図録など）。	15

2.2.2.3 什器・サイン

改修工事に伴う美術館のリニューアルでは、グランドギャラリーを中心とした館内各所の什器やサインを一新するプロジェクトが進められており⁵、美術図書室の空間や什器、サインについても、このプロジェクトの方針に従って進めることになった。美術図書室の空間構築とサイン計画の監修には同プロジェクトの建築家の乾久美子とアートディレクターの菊地敦己が携わった。

閲覧室の雰囲気は、改修前のグレーを基調とした重厚な空間（写真2）から、明るく柔らかい雰囲気へと一新した（写真3）。

5 建築家の乾久美子と菊地敦己による横浜美術館の空間構築改修。詳細は次を参照。「横浜美術館空間構築」『新建築』100 巻3号、2025年3月、74-81頁。



写真2 美術情報センター（2016年撮影）
撮影：加藤 健



写真3 美術図書室（2024年撮影）
撮影：新津保建秀

書架や机、カウンター、ソファなど閲覧室内の什器類は、美術館のリニューアルプロジェクトのコンセプトに合わせて製作された⁶。什器や家具の配色は、茶色3種ピンク3種で、美術館の建材として使われている御影石の色から採用されている。また、美術館のサイン製作の際に中心的な素材として用いられたストランドボードが、図書室内のサインでも採用され⁷、使用するフォントも美術館内で使用するフォントと統一し、「Noto Sans」とした。

製作したサインは、計16種、253点になった。具体的には、フロアマップ、図書室利用案内、操作案内・規約、カウンターサイン、棚番号、書架ジャンル、書架表示、卓上サイン、スタンドサイン、室名サイン、返却台、ゲート横スタンドなどを製作した。

サインの種類や表示内容、数量については、司書が中心となって検討を進めた。長期の運用に耐えられるよう、書架ジャンルや雑誌書架表示については、マグネットをつけたプレートを製作し、資料の書架移動によりジャンルが変更した場合でも、簡単に表示が変更できるようにした。

2.3 ソフト面のリニューアル

2.3.1 資料収集方針・資料購入費・蔵書更新

美術館の開館時から蔵書の収集方針は存在していたが、リニューアル後の活動方針に即した資料収集を行うため、方針を見直した。開館当初は美術分野全体を幅広く収集する方針が立てられていたが、限られた予算のなかでは広範囲を網羅することが難しい。そのため、新しい収集方針では、横浜美術館の収蔵作家や展覧会、横浜の美術に関連する資料を優先的に収集することにした（資料2）。

資料2

開館当初の美術図書収集計画 ⁸	新しい収集方針 ⁹
<ul style="list-style-type: none"> ・横浜開港以降の19、20世紀の美術（写真を含む）に関する文献 ・収蔵作品およびゆかり作家に関する文献 ・美術全般について、基本的な知識を得られる文献 	<ul style="list-style-type: none"> ・横浜美術館の活動にかかわる図書や資料 ・収蔵作家に関する資料 ・国内外の国際展、芸術祭に関連する資料 ・海外の主要美術館の企画展図録 ・美術関連の一般図書 ・参考図書（辞書・事典類）

6 閲覧席の椅子は既製品。

7 フロアマップ、図書室利用案内、操作案内・規約に使用されている。

8 『横浜美術館年報』1号、1993年、132頁。

9 「公益財団法人横浜市芸術文化振興財団横浜美術館令和5年度業務報告及び収支決算」『横浜美術館』横浜美術館、https://yokohama.art.museum/wp-content/uploads/2025/08/houkoku_R5.pdf（参照 2025-11-15）

収集方針の策定と並行して、資料購入費の見直しも行った。リニューアル前は洋雑誌の購読料にほとんどの予算が費やされていたが、必要な図書（和書、洋書）や展覧会カタログをバランスよく購入していくことにした。さらに、学術雑誌の電子ジャーナルであるJSTORのMuseums Collectionを契約し、閲覧できる雑誌タイトル数を拡充させた。

2000年代から組織改編などの影響で十分な購入予算が確保できなかったため、蔵書の更新ができない状況が長く続いた。改修工事期間中に蔵書構成を分析し、2000年代以降に刊行された図書を中心に、収蔵作家に関する資料やレファレンスに使用するための辞書・事典類など、必要な資料を集中的に収集した。

2.3.1.1 図書館システムリプレイス

2022年度に図書館システムのリプレイスを実施した。23万冊以上となった蔵書¹⁰を効率よく管理・運営し、より高度な検索サービスを拡充させるため、株式会社ブレインテックのオンプレミス型の図書館システム「情報館」から、日本事務器株式会社のクラウド型の図書館システム「ネオシリウス・ラボ」へ移行（リプレイス）した。

リプレイスにより、新たなオンライン蔵書目録検索（OPAC）¹¹では、利用者への情報提供機能が充実し、高度な検索も可能となった。具体的には、OPAC上で新規受入図書の案内や展示関連の資料の紹介ができるようになった。また、特定の主題¹²や作品情報（作家名、作品名など）¹³から蔵書検索を行うことができるようになった。OPACについては、書誌データと所蔵情報を提供する目録としての用途に限定することなく、様々な観点から蔵書を紹介する情報発信ツールとして、今後活用していくことを検討している。

2.3.1.2 書誌データの整備

図書館システムの移行に伴い、これまでシステム内に蓄積されてきた目録データの整備を実施した。

当館では、書誌データ入力のマニュアルが整備されていなかったため、出版者やページ数、大きさなどの資料を判別するために必要な情報が欠落しており、探している資料へ容易にたどり着けない状況が生じていた。さらに、日本目録規則など、国内の図書館で参照されているルールに則った書誌データが作成されていなかった。

新しい図書館システムへのデータ移行作業を機に、全ての書誌データの見直しを行い、情報が不足している書誌データについては、情報を補充する作業を行った。書誌データに必要な書誌事項が不足なく入力されるよう、データ入力のマニュアルを新たに作成した。また、目録規則に準拠した書誌作成を行うために、入力作業のフローも見直した¹⁴。

加えて、NACSIS-CAT¹⁵準拠の書誌データ項目を採用している図書館システムへの移行だったため、これまでの書誌データ項目についても見直し、整理した。リプレイス後の書誌データ項目は資料3の通りである。NACSIS-CATで準拠されているデータ項目をメインとしつつ、図書資料の検索に必要なデータが蓄積できるようにした。美術資料特有のデータも蓄積できるようにした。

10 2019年度から実施した雑誌の遡及登録（本稿2.3.1.3参照）により、2021年度末時点で蔵書は237,956冊となった。

11 『横浜美術館蔵書検索（OPAC）』<https://opac.yokohama.art.museum/>（参照2025-11-15）

12 新たに書誌データに件名データを追加したことによる。件名データは、当館収蔵作家名や芸術祭を中心に付与をすすめている。図書館システム「ネオシリウス」の典拠機能を用いることにより、表記の揺れをも踏まえた検索ができるように工夫をしている（例「Biennale di Venezia」「Venice Biennale」「ヴェネチアビエンナーレ」）。

13 書誌データに収蔵作品図版の掲載情報（作家名、作品名、掲載ページ、当館収蔵作品番号等）を追加し、OPACに表示、検索対象項目にしたことによる。おもに当館収蔵作品の掲載情報を中心にデータ整備を進めている。OPAC詳細検索画面の検索項目「収蔵作品掲載」から検索ができる。

14 入力作業のフローは、「入力」と「確認」の2つの工程に分かれており、「入力」では、スタッフがマニュアルに従って入力を行い、「確認」では、日本目録規則などの目録規則を理解しているスタッフがチェックする体制とした。

15 国立情報学研究所が提供する目録所在情報サービス。大学図書館等が利用している。

資料3

リプレイス後の書誌データ項目の例（一部）

『戸田沙也加展「沈黙と花」』（横浜美術館，2025年）の書誌データ。

項目名	データ例	NACSIS-CATに 準じる項目
書誌ID	1000009577	
資料区分	和カタログ	
図/雑	図書	
和/洋	和書	
GMD	印刷物	●
SMD		●
YEAR	2025	●
CNTRY	日本	●
TTL	日本語	●
TXL	日本語	●
ORGL		●
REPRO		●
VOL		●
ISBN		●
PRICE		●
XISBN		●
TR	戸田沙也加展「沈黙と花」/ 横浜美術館編 トダ サヤカ テン「チンモク ト ハナ」	●
ED		●
PUB	横浜: 横浜美術館, 2025.9	●
PHYS	14p; 21cm	●
VT	CL:Toda Sayaka: blooms in silence	●
PTBL	アーティストとひらく = Opening dialogues <>//	●
AL	戸田, 沙也加 トダ, サヤカ <>	●
本文言語注記		
タイトル注記	タイトルは奥付による	
著者注記	デザイン: 今村圭佑	
著者注記	撮影: 表恒匡	
版注記		
出版注記		
形態装丁注記	肖像あり (戸田沙也加)	
内容注記		
収蔵作品図版	小川原 脩《双生児対話》(p.5-6) [88-OJ-018]	
収蔵作品図版	小川原 脩《砂漠の花》(p.7) [88-OJ-016]	
収蔵作品図版	ミロ、ジョアン《花と蝶》(p.7) [88-OF-008]	
会場名	横浜美術館ギャラリー5	
開始年月日	2025.06.28	
終了年月日	2025.11.03	
主催者名	横浜美術館	
CLS		●
SH	FREE: 戸田, 沙也加 トダ, サヤカ//A	●
内容細目	はじめに. p.1.	
内容細目	戸田沙也加. 展覧会に寄せて. p.2.	
内容細目	大澤紗蓉子. たったひとりの孤独なデモが、誰かのなかに残されていくように. p.11-12.	
内容細目	作家略歴. p.13.	
内容細目	作品リスト. p.13.	

2.3.1.3 遡及登録による所蔵情報の充実

2018年度まで、雑誌はタイトル情報のみが図書館システムに登録されていた。そのため、OPACから各号の所蔵状況が確認できず、利用者から問い合わせがあるたびに、職員が紙の原簿で所蔵状況を確認して案内をしていた。改修工事に伴い、すべての蔵書を外部倉庫へ移動させることになり、蔵書を物理単位で管理する必要が生じた。これを機に、雑誌の遡及入力を外部委託により実施し、結果、すべての所蔵雑誌各号について、図書館システムへのデータ登録がなされ、OPACで誰でも所蔵が確認できるようになった。

マイクロ資料についても、所蔵してはいたが図書館システムに登録されていなかったため、長らく死蔵の状況だった。マイクロ資料も、休館期間中に図書館システムへの遡及登録を行い、OPACで所蔵を確認できるようにした¹⁶。マイクロ資料閲覧機器の更新も行い、新たにデジタルフィルムスキャナー型のマイクロリーダーを導入した。

2.3.1.4 映像資料

映像資料は、美術情報センターの「ビデオライブラリー」コーナーで公開されてきた¹⁸。これらはおもに磁気テープに記録されていたため、保存の観点から一部の映像資料をデジタル化した¹⁹。デジタル化した映像資料は、美術図書室の「映像視聴コーナー」で視聴することができる（図1中の番号12付近）。視聴ブースは2つあり、ディスプレイの検索画面から任意のタイトルを選択し、映像を再生する仕組みである²⁰。なお、「映像視聴コーナー」で視聴可能なタイトルは、OPACからでも確認することが出来るように、目下準備を進めている²¹。

2.3.1.5 組織体制

先述の横浜美術館第3期指定管理提案書において、人的体制の強化が提案され、2023年度より学芸グループ内に美術図書室業務を中心に置いたチームが新設された。そして、正規雇用の司書2名で業務にあたる体制が整えられた。これまで契約職員が入れ替わりで業務を担当し不安定な運営状況だったが、長期的な視野で運営方針の検討がなされ、組織体制の整備に至った。

16 資料IDがMから始まる資料が、マイクロ資料に該当する。

17 コニカミノルタ LS5100R。

18 映像資料は「美術情報ギャラリー」（1989-2004年度）および「美術情報センター」（2005-2022年度）で公開されてきた。当時の提供の様子は、次に詳しい。

深田独「美術館における映像情報の提供の可能性」『情報の科学と技術』42巻1号、1992年、47-52頁。

松永、2023年、55-61頁。

『横浜美術館年報』での報告にも詳しい。

19 MP4形式に変換。デジタル化の基準は、当館や当館収蔵作家に関連する主題とした。

20 映像視聴システムはスタンドアロン形式。HTMLファイルで構成。

21 視聴可能タイトルは、これまでも次で検索可能だった。

『ビデオライブラリー検索』<http://collection.yokohama.art.museum/video>（現在公開停止）

『横浜美術館 美術情報センター OPAC』<https://yma.opac.jp/opac/top>（2023年4月公開停止）

3 まとめ

以上、美術図書室のリニューアルについて、ハード、ソフトの両面から報告した。

リニューアルに伴い、改めて横浜美術館のなかでの図書室のあり方や、今後の活動について再検討する機会を得たことにより、美術図書室の指針となる活動方針や収集方針を明確にすることができたことは大きな収穫であった。また、書誌データや所蔵データを整備することで、OPACで詳細な情報が提供できるようになり、蔵書へのアクセスがしやすくなったことも大きな成果といえる。

今後の課題としては、改修工事が及ばなかった閉架書庫の状況改善が挙げられる。蔵書の大半が保管されている閉架書庫は、空調や電気設備が更新されるにとどまり、開館ときに導入された電動集密書架の更新までには至らなかった。部品の製造が終了しているため、電動集密書架の更新については、喫緊の課題として残っている。また、資料の保管スペースについてもすでに余裕はなく、書架狭隘化の対策として、複本や寄贈図書を受け入れなどの方針を見直していく必要がある。

本稿執筆の2025年12月現在、リニューアルオープンから1年が経過し、実際の利用状況などが、ようやく明らかになってきた。資料を通じた展覧会事業（企画展やコレクション展）との連携はすでに始めているが、教育普及グループが実施しているプログラムとの連携など、取り組めていないこともある。美術図書室の運営状況を確認しながら、可能な範囲で少しずつ取り組みを増やしていく予定である。

美術館が置かれている状況を理解し、利用者のニーズを捉えること。それらの要素を持続可能な運営に落とし込んで、図書室のサービスに反映させていくという、今回のリニューアルで経験したサイクルを今後も継続し、変化と成長を続ける図書室でありたい。

(横浜美術館主任司書／長谷川)

(横浜美術館司書／石川)

Renovation of the Art Library (formerly Art Information and Media Center) at the Yokohama Museum of Art

Hasegawa Naho (Librarian, Yokohama Museum of Art)

Ishikawa Meiko (Librarian, Yokohama Museum of Art)

The former Art Information and Media Center at the Yokohama Museum of Art oversaw “learning,” one of the museum’s three founding objectives alongside “seeing” and “creating,” and offered users a broad range of information related to art. During the major renovation of the Yokohama Museum of Art that began in March 2021, the Art Information and Media Center was relocated from the third floor to the lobby floor. It was renamed the Art Library and reopened on November 1, 2024.

This paper reports on the renovation of the Art Library, a process that took place over approximately four years. It first outlines the new activity policy formulated for the Art Library in accordance with the museum’s vision, along with the library’s position and functions within the institution. It then traces the process of reconfiguring the library as a place that anyone can easily visit and that is open to a wide range of users, presenting an overall picture of the project.

The paper is organized into the following five sections:

- (1) Formulation of a new activity policy and review of the collection policy
- (2) Reconfiguration of the reading room, including spatial design, furniture production, and signage planning
- (3) Updating of the library collection
- (4) Migration of the library system and the accompanying reorganization of bibliographic data
- (5) Establishment of a sustainable personnel framework

Finally, the paper examines the project’s outcomes and outlines issues to be addressed going forward. This marked the third time the facility responsible for “learning” activities at the Yokohama Museum of Art has undergone reconfiguration, and the first time since the museum’s opening that the reading room received a comprehensive overhaul, including relocation. The project went beyond physical improvements, providing an opportunity to reassess from the ground up both the activity policy and the Art Library’s position within the museum. At the same time, issues such as insufficient storage space in the closed stacks and the need to update the electric mobile shelves were not addressed in this phase of work and remain urgent challenges for the future.